

魔法科高校の劣等生 Missing_number

イオハ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本来存在しない四葉の分家

その分家の子として生まれた主人公が色々お話に干渉するお話。

転生とか憑依の要素はちよびつとしかないのです。

文章構成下手です。

目次

M i s s i n g	N o .	1 7	活動開始	52
M i s s i n g	N o .	1 6	風紀にて災難	44
M i s s i n g	N o .	1 5	模擬戦と拉致	36
M i s s i n g	N o .	1 4	看視と監視	28
M i s s i n g	N o .	1 3	一先ず収束	21
M i s s i n g	N o .	1 2	接触そして一悶着	14
M i s s i n g	N o .	1 1	入学と任務	7
N o .	1		入学	
M i s s i n g	N o .	0 0	前触れ	1
N o .	0		前夜	

No. 0 前夜

Missing No. 0—0 前触れ

某年12月下旬。年越しのために家の大掃除で忙しくなる時期、とある一軒の家では別の意味で忙しなかった。

その家は魔法師の中でも百家の家系であり、魔法師界隈では珍しくも「四」の数字の入る家系の四々舞家ししまいだった。

四々舞家は二階建ての一軒家に加え、敷地内に道場がある。その道場内では少年と壮年の男性が木刀を構え、相対していた。

二人は構えを解き、少年はへたり込み壮年の男性はそのまま立ったままだった。

「……やはり父上にはまだ勝てないようです」

「まだまだ若者に後れをとるほど耄碌もうろくはしておらんさ」

少年——四々舞兼けんと壮年男性——四々舞武雄たけおは毎朝の修練をこなしていた。

四々舞家現当主である四々舞武雄は近接格闘剣術の達人であり、自己加速術式や硬化魔法を好んで使用していた。第三次世界大戦でもその剣の腕と継続戦闘能力から「不滅の劍豪イモータルソードマスター」の二つ名で畏怖の対象となっている。

一方の四々舞兼はと言うと、武雄にはまだ及ばないものの、現段階で同年代又は現役の魔法師にも引けを取らない技術を持ち合わせているのもまた事実であった。

つまり、兼はある意味では戦闘魔法師として中学生の身でほぼ完成していた。

「……兼、お前はあの時に変わったよ。何がどうなったかは皆目見当もつかん。ただ、私は今のお前の方が扱き甲斐があつていいとは思うがな。」

修練終わりに汗を拭いていた兼に武雄はぽつりと呟く。

そう。少し前までの兼はここまで優等生ではなかった。どちらか

というところくでなしの部類に入っていた。

——3年前の兼の誕生日の夕食の帰り道、兼は交通事故で意識不明の重体になった。

それまでの兼はろくに修行もせず怠惰に生活していたため、魔法の使い方は知っていても実際に発動したことが無かったために、発動が間に合わず、自前の情報強化すら展開していなかった結果である。

家族の適切な応急処置のおかげで救急車が来るまで持ち、病院で一命を取り留める。しかし頭を打っていたのか記憶の混濁が酷かった為に落ち着くまで面会謝絶となった。

数日で記憶の混濁も落ち着き、普通に会話もできるようになったがその時には性格ががらりと変わっていたのだ。

しかし、入院時最後のメデイカルチェックでも異常は無かったためそのまま退院する運びとなった。

退院するとしばらく自室に籠もり、勉強に取り組むようになり、兄や姉、果てには父や母に魔法の稽古を付けてくれと頼むようになり、結果一番やる気を出したのが父の武雄である。

——と言うのが武雄の発した言葉の意味である。

「……なんてことはありません。事故に遭ったことで自分の未熟さや命の大切さに気付き、真面目に生きようと決めただけのことです。」と、まともに聞こえる回答をする。しかし——

(実は貴方の息子さんは3年前の事故で亡くなっていて一命を取り留めたのは私が何故かその息子さんの中に入ったからなんです。なんて伝えられるわけないよ……。)

——そう。そこにいる四々舞兼は四々舞兼に非ず。見た目だけ一緒にの別人と言っても過言ではない存在なのである。しかも——

(まさかこの世界が実在するとはなあ……魔法科高校の劣等生の世界。)

前世の記憶持ちでこれから起こることを記憶しているのである。

彼は生前、ごく普通のライトノベルが好きな大学生だった。日課の本屋巡りと図書館巡りの途中、兼同様に交通事故に遭い他界してい

る。

本人も車の勢いから死ぬことを察していたが、気が付けば病院でその上で、しかも見た目も世界も何もかもが違えば混乱もする。医者も事故による記憶の混濁があつて当然と判断し、容体が落ち着くまで両親も含め面会謝絶をしてくれた。

そのおかげで状況の整理と気持ちの整理、そして兼の記憶を辿る余裕ができたことは大きかった。ナイス先生。

しかし前世に未練がなかったわけではない。だが死んでしまったものはどうしようもない上に新しい人生を歩めることは奇跡と言つても過言ではないと区切りをつけ、この世界で生きていくことを決めたのだ。

——父武雄の一言から自分の境遇を再確認する兼。

「儂としては兼との修行はとても有意義だったぞ。剣と沙耶にも修行を付けたこともあつたが、あの二人は特別でな。兼ほどみっちり修行することができなくて少し手を持って余していたのだよ。」

そんなことを知らない武雄は朗らかに笑いながら兼にいつも通り話しかける。そしてその話を聞いた兼は苦笑していた。

「……ところで兼よ。おぬし高校は第一高校に入学する予定であつたな？」

自分では上手く方向を変えたの思っている武雄ではあるが、周りから見れば違和感のある話題の切り替え方だった。

「はい。来年の春に魔法大学付属第一高校に入学する予定です。既に志願書も書き終え、後は提出し試験に臨むのみです。」

突然の話題転換に兼は疑問を持ちつつも、すぐに返事をした。「そうかそうか……実は先日、本家の方から連絡があつてだな。」

本家とは四葉家のことを指す。四々舞家は表向きは百家の源流ということになっているが、本当は十師族である四葉家の分家の一つである。

ここ最近で一番動いている分家と言えば黒羽家であるが、少し前ま

では四々舞家も実働部隊としてよく動いていた。

兼は前世の記憶持ちとして考えられることとして真つ先に思いついたのは、とある兄妹の事だった。

「なんと連絡があったのですか？」

「……高校入学後、司波兄妹とコンタクトを取り、取り巻きの一人として仲良くする風を装いながら護衛せよ。だそうだ。」

兼としては半分予想通りで半分予想外の指令だった。

「……解せません。関わらずに遠巻きから護衛するのであればまだ理解できますが、どうしてそのようなリスクのあることを。」

それに気になることもある。父武雄は「司波兄妹」と言った。次期当主候補である司波深雪だけではなくガーディアンである司波達也も含めて守れと。

「お前の疑問も十分承知している。だが、これは当主様直々のご指示だ。」

おそらく父武雄もこの指示の意図を掴みきれていない様だ。兼自身もよくわかっていないが、取り巻きになれば遠くからできないフオローもできるだろうということなのかもしれない。

数多の推測をするものの、確信を持てる推測をすることはできなかった。わからないことを考えても仕方がないと思いを切り替える。「当主様の指示にも相応の理由があるのだろう。我々はそのオーダーを遂行するのみだ。」

武雄も確信には及ばずともある程度の予測を立てたのだろう。呆ける時間はないと言わんばかりに話を切った。

「……解りました。それでは私はどちらになればよいでしょうか？」

魔法大学付属第一高校には定員が200人。そのうち上位100名を一科生、以下100人を二科生と呼ぶ。

一科生と二科生の差は教師の有無と制服のエンブレムの有無のみで、オンラインの授業に参加や、施設の使用、資料の閲覧などは可能である。

しかし、それでもやはり当の本人たちは格差を感じてしまうのだろう。一科生は二科生を蔑み、二科生は己を貶める。

兼はそのことをくだらないと思っっているが、慣習になってしまっていることを態々逆らって悪目立ちをするのもよくない。

一科生になろうと二科生になろうと変わりはしないのだ、周りの評価など気にする必要はない。ただ穏便に事を為すまでだ。

「どちらでも構わん。本家からは条件等は付けられてなかつたからな。」

条件がない。つまりそれなりに信頼されていると捉えることができるのだろう。珍しく武雄の顔が少し緩んでいた。

四々舞家は実力で物事を図る傾向にあるため、実力と権力の両方を兼ね備える真夜に信頼されているということは武雄も嬉しいのだ。

「そうですね……では、二科生で入学するとします。」

「ほう……理由を聞いてもいいか？」

兼の実力ならば成績上位を狙うことも可能だろう。しかし、敢えて二科生を選んだのには理由がある。

「はい。まず第一に自分の実力を隠蔽するためです。これにより第一高校に所属する面々に能力を誤魔化すことができます。いざというときは本気を出しますが、必要以上に力を見せることはリスクがあると判断したためです。」

百家の源流という表の顔を持っている手前、二科生になると白い目で見られるかもしれないがそれはそれだ。気にしなければいいだけのこと。

「第二に兄の達也の行動を監視するためです。」

「達也をか。彼には力があるのは知っっているが監視する必要があるのか？」

武雄は達也の力の一端を知っている。が、本家の使用人達や他の分家の人間からの扱いも知っっているため、どう扱えばいいのかはつきりしていないのだ。

「必要です。達也と深雪さんのどちらをフォローすることが多いかという点と確実に達也の方でしょう。深雪さんのフォローはガーディアンであり、何より兄である達也が確実に行うはずです。」

原作知識だと、達也はトラブルメーカーだ。彼を監視しフォローす

ることで達也ができるだけ目立ちにくくすることができよう。

「そして何より、深雪さんは達也のことを慕っている。言い方が悪いかもしれませんが、深雪さんのほうから達也のもとに向かうでしょう。」

まず前提として兼は男だ、男同士で友情を育むほうが自然だろう。逆に男女間の友情は少なからず存在するが少数派だ。初対面の年頃の女性に男から声をかけるということは周りから色恋と勘違いされかねない。

当人はさして問題にしないだろうが、周りの面々はそうはいかない。確実に話題になる。変に勘繰られるよりかは大分マシと言えるだろう。

「ふむ……。お前の言い分は分かった。言っていない理由もあるだろうが、この際目を瞑ろう。」

言っていない理由を即座に看破されて少し恥ずかしいが表情には出さないようにする。

「この際だ、能力の隠蔽する訓練もつけてやろう。付け焼刃ではばれる可能性があるからな。」

そう言いつつ、木刀の素振りを始める武雄。兼は疲労が蓄積しているため立つのがやっとだった。

「何心配するな。二ヶ月もすれば完璧になる。お前は筋がいいし、なんせ私が教えるのだからな。」

そこには不敵に笑う無情の鬼（直隼）が立っていた。

——それから二ヶ月後。兼は能力の隠蔽技術を手に入れたが、短期間での激しい訓練が軽いトラウマになったとか。

No. 1 入学

Missing No. 1-1 入学と任務

2095年4月。国立魔法大学付属第一高校入学式当日。

天気は晴れ雲一つない空と綺麗に咲き乱れる桜は、新入生には新しい生活への祝福を、在校生には新学年での生活の激励をしているかのようだ。

そんな中、早めに登校していた兼は学校の敷地内を散策していた。

散策と言っても、これと言って深い意味はない。記憶上二度目の高校生活な上に一度目とは全く異なる状況なため何もかもが新鮮でわくわくが止まらなかったのだ。

しかし、兼は二科生として入学したのだ。周りからの視線はあまり好意的ではない。

途中で一科生の上級生と鉢合わせするも、通り過ぎた後に小さな声でここそそと何かを言われる始末。

無理もない。自分は二科生な上にこんなに早く学校へ来ているのだ。

『二科生なのに張り切っちゃって。』とか『分をわきまえろよ。』等々、差別的発言が聞こえたが気にしない。

入学前にそう決めたからね。そういう小言はこれから腐るほど聞くだろうから今から気にしてたらきりが無い。

そもそもなぜ学校に早くから来ていたかという点、司波兄妹のあのシーンを見てみたいからという邪な気持ちがあったりなかったり。

もちろん任務のことも忘れていない。司波兄妹の友人として取り巻きになり護衛することだ。

前世の記憶を探るに彼らに護衛をつける必要はないと思われるがそれを口にしたところで意味のないこと。四葉の分家として当主様から直々の指令を拒否することはできない。

今の生活に不満はない。むしろ感謝すらしている。これと言って特技もなければ見た目も普通、性格は消極的を通り越して拒否的。一人でいることが好きだった前世の自分には勿体ないくらいの贅沢だ。

この世界での実戦経験はまだないが、人を殺めることを躊躇わない様に気を持ち続けてきた。というかそういう気持ちを持つ暇すら与えられないくらい父親に扱かれたわけだが……。

地獄の扱きを思い出しそうになり思考を巡らせるのを一旦止め、入学式の会場となる講堂の前に向かう。

そう、あのシーンを見たいが為に。

講堂前に到着。開会までまだ二時間ある為、新生やその保護者の数はまだ少ない。それにあの兄妹は目立つからすぐに見つかるだろうと周囲を見回す。

目的の人物達はすぐに見つかった。

それもそのはず彼らの周囲にだけ人がいないのだ。まるで人払いの魔法でも使っているかのよう。

実際は現段階で講堂に入る必要のある人間は既に入り終えていて、そうでない人間は校舎を見回っているだけなのだが……。

気配を偽装し、その上で物陰から二人を司波兄妹観察する。

深雪さんが頬を赤く染めている様子からして、ちょうど会話の中頃

だった模様。

（ヤバイ……あのシーンを間近で見れるだけで感動モノなんだけど！）

気配を悟られないように気を配っている為、外面上は平静を装っているが心の内はお祭り騒ぎ。

しかしこれ以上心を乱すのはまずいと判断し、心の騒めきを落ち着けるために二つ深呼吸する。

心を落ち着けたのはいいが、今やっている行動が完全にストーリーと同じことに至る……が気にしない。

改めて二人の観察を再開するも既に会話は終わり、深雪さんは講堂の中へと消えていく途中だった。

達也のほうもその場から移動して講堂前には誰もいなくなる。

勿体ないと思わなくもないが、そもそもこの行動自体完全に任務外の行動なわけであって。

ある程度行動の自由は保障されているとはいえ、下手にでしゃばると（主に父親から）制裁を下されないわけでした。

「……またぶらつくか。」

やりたいことはやったので開会までの時間まで改めて見て回ることにした。

入学式が始まるまで後20分となったところで兼は講堂に向かった。

誰かさんと違って生徒会役員に声をかけられることもなく講堂に到着。中に入り空いている座席を探す。

（やっぱり前半分が一科生で後ろ半分が二科生なのかあ……）

座席は自由のはずなのに見事なまでに分かれるものなのかと、一周

回って感心してしまう。

だからと言ってこの暗黙の了解を破る必要はない上に、仮に破って悪目立ちするような行動をしようとも思わない。

そした、自分の任務のことを考えるのならこの段階で達也とコンタクトを取っていた方がいいのかもしれないが、既に達也の周りの席は埋まっている。

(達也と同じE組になることを願うばかりだよ……)

とりあえず空いている後ろの座席に座り始まるのを待つ。

入学式が始まるまで誰かに話しかけられるということもなかった。

おかしいな……隠形を使っているわけではないはずなんだけど……。

こうして人生二度目の高校の入学式は静かに始まり、静かに終わった。

補足するが、入学式自体は新入生総代の答辞を誰も認める美少女である深雪さんが務めたので、静かなのは静かだが静寂とはまた違う静かさだった。

入学式が終わり、今はIDカードの交付のために列に並んでいる最中だ。ここで兼の任務の何度が決まる瞬間でもある。

(頼む……E組であってくれ……！)

その願いが届いたのか、兼が振り分けられたのはE組だった。

軽いガッツポーズを取り、早速E組の教室に向かう。

教室にいる人の数は十人ちよつとだった。その中に達也はいない。

そう、達也たちはホームルームに参加せずすぐ下校してしまうからだ。

同じクラスになったのだから焦る必要もないと思い、兼は自分の席に座る。

座席の順番的に兼の後ろが達也になる。明日の受講登録の時に話しかければいいだろう。

そして、そのコミュニケーションを円滑に進めるために布石を少し打っておこう。

兼は前の座席の人物に話しかけることを決行する。

トントンと前の席の人物の肩を叩く。

「ん、なんだ？」

こちらに振り返り、用件を聞く青年。特徴として大柄で骨太な体格にゲルマン的な彫りの深い顔立ちをしている。

「俺、君の後ろの席なんだ。だから挨拶をしようと思ってね。」

「なるほどそりやもつともだ。お前さん名前は？」

「おつと悪い悪い。俺の名前は四々舞兼ししまいけんって言うんだ。気軽に兼って呼んでくれ。」

「オーケー。じゃあ次は俺の番だな。俺は西城レオンハルトだ。俺のこともレオでいいぜ。」

それっぽい理由でレオこと西城レオンハルトと接触することに成功。彼は主要人物な上に達也の高校生活初の男友達だ。仲良くなることに越したことはない。

そのままレオと仲良くなった兼は、ホームルーム後もレオと一緒に行動し、学外の外食店で飯を食べそのまま解散となる運びとなった。

「疲れた……」

帰宅し、自室のベッドに倒れ込む。制服のまま倒れ込んだが、しわになるといけないのですぐ起き上がり私服に着替える。

服のセンスが絶望的な兼は、ファッションを気にする必要のない武雄のお下がりの作務衣を好んで着ている。

着替えも終わり、ベッドに座り今後の方針を再確認する。

まず第一に司波兄妹にコンタクトを取る必要がある。これはレオと仲良くなったことできつかけを作ることができたと思う。

次はどう仲良くなるかだが……よくよく考えればまだ入学して間もないのだ。深く考えずに気軽に話しかければ自然と仲良くなれるだろうと判断。

最後に護衛することだが……。

これはまあ……個人的には護衛は必要ないと思うが、やらないわけにはいかないので護衛はする。必要か不要かは一先ず置いておき。

前世の知識を頼りに行動するのはいいが、過剰に鑑賞した結果、取り返しのつかないことが起きてしまう可能性もあるから深くかかわりにくい。

こういう時、自分はこの世界の人間でありこの世界の人間ではないことを思い知らされる。

そもそも前世の記憶の中に『四々舞』という四葉の分家は存在しなかったのだ。

その時点でこの世界が少し違うものだと言えるのは間違いない。

考えても答えが出るわけがない。答えのない問題に答えを見出そうとしているようなものなのだから。

難しいことを考えるのはやめよう。物語はまだ始まったばかりだ。

考えることを切り上げ、明日の準備をする。と言っても、言うほど準備するものはないが。

時刻は22時半を過ぎたところ。準備も終わり、後は寝るだけだ。自覚はなかったが普段以上の早起きや入学式等の普段とは違う出来事が多かった為に気が張っていたのだろう。

(明日も学校楽しみだな……)

ベッドに横になった途端に睡魔に襲われ、それに抗うことなく兼は眠りについた。

◇

◇

◇

——同時刻。司波家にて。

学生は寝る準備を始める時間帯だ。司波兄妹も例外じゃない。

しかし、達也は自室にて考え事をしていた。

達也は講堂前での出来事を見ている人間がいたのには気が付いていた。

しかしどこから見ているのかを大雑把にしか把握できなかったのが不可解であった。

(相手は俺の^{エレメンタルサイト}の目を知っている。)

把握できなかったこと自体は問題ではない。問題なのはなぜ^{エレメンタルサイト}精霊の目を俺が持っていることを知っていたかだ。

(俺の目のことを知っているのは四葉の人間か、国防軍の一部の人間だけ……。)

警戒する必要があると判断するも、このことを深雪に話すには情報が少なすぎる。

当面は学校内でも気が休まらないことを考えると少し憂鬱な気分になるが仕方ない。

(やれやれ……。入学初日から不安要素を抱えることになるとは。)

可能であれば翌日に、忍術使いであり達也の体術の師匠でもある九重八雲に話を聞いてもらうかとも考えつつ、達也は眠ることにした。

高校生になって二回目の朝だ。

今日は普段通りに起き、朝の鍛錬をした後に学校へ向かう。

登校途中でレオと偶然合流し、そのまま一緒に登校する流れに。

「兼、今日は何をするか知ってるか？」

「今日は履修登録とか授業の見学じゃなかったっけ？」

そのまま教室に到着した後も会話は続き、席が近いこともありこのまま本鈴が鳴るまでお喋りをするかと思っていた時。

「……なあ兼、あれ見てみろよ。キーボードオンリーで端末を操作してるやつがいるぜ。」

レオが顎で兼に後ろを見るように促す。

促されるままに後ろを向くとそこにはキーボードオンリーで端末を操作する達也の姿が。

何時来たのかわからなかったがこれは僥倖。兼が話を振るまでもなくレオが達也のほうに食いついてくれた。

「珍しい上にすげえな。今どきキーボードだけでつてのは。」

「たしかに……。俺もキーボードを使えなくはないが、あれだけの速さで操作するのは無理だな……」

レオは達也と初対面だが兼は（知識上）初対面ではない。だが、違和感のない接触をするためにレオの話に乗っかる。

ついでに補足だが、兼は前世の記憶に引つ張られる形で体に馴染むものや馴染まないものがある。その一つが端末操作だ。

この世界での端末操作にはキーボードの他に視線ポインタ脳波アシストなどがある。これらの技術は初見の操作性だけで言えばキーボードより優れているだろう。

それでも兼は前世の関係でキーボード操作のほうが馴染むという結果になった。

あくまで馴染むだけである。普通の人より早く早く打てる程度だ。例えるのなら、達也の3分の2程度の速度でならキーボード操作をミス

なく行える。

一通り操作が終わったのか、達也は操作を止め端末の画面から顔を上げる。

その時にレオと兼と目が合う。

「……別にみられても困りはしないが。」

「あつ？ああ、すまん。珍しいもんで、つい見入っちゃった。」

「珍しいか？」

「珍しくないか珍しいかで言ったら珍しいと思うぜ？俺もキーボードを積極的に使うが俺以外でキーボード操作に精通してるやつは初めてだ。」

レオが見入ったことに対し軽く詫び、達也の疑問には兼が答える。

「慣れればこつちのほうが速いんだがな。視線ポインタも脳波アシストも、いまいち正確性に欠ける。」

「それには俺も同意するが、簡易的で安易的な操作性故にみんなそつちに流れてしまってるのさ……。」

「なるほど。そういう見方もあるか。」

兼と達也でキーボード談議に熱が入り始める。が、自己紹介をしていないことに気づき、レオと兼は話を一旦切り上げ名乗ることにする。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺の名前は西城レオンハルトだ。俺のことはレオでいいぜ。得意魔法は収束系の硬化魔法だ。そんでコイツが——」

「四々舞兼って名前だ。兼って呼んでくれ。よろしく。」

「司波達也だ。俺のことも達也でいい。」

「OK、達也。」

「わかった。改めてよろしく達也。」

そのあと軽く会話した後、レオが達也に得意魔法は何かと質問する。が、達也は実技が苦手で魔工技師を目指していると言う。

「え、なにになに？ 司波くん、魔工技師志望なの？」

「達也、コイツ、誰？」

達也の将来を聞き興味津々な明るい栗色髪のミディアムショートカット女子に対し、レオが引き気味に指を差しながら達也に訊ねた。そして始まるレオとその女子との口喧嘩。ある意味すごいな……初対面の人間同士こうもいがみ合えるのは。

「……エリカちゃん、もう止めて。少し言い過ぎよ。」

「レオ、落ち着けて。今のはお互い様だし、口じゃ勝てないと思うぜ？」

今にも取っ組み合いを始めそうな雰囲気醸す二人を、黒髪のやや長めのボブカットの眼鏡をかけた女子と兼の二人が仲裁に入る。

仲裁が入った後もいがみ合う二人。それをどこ吹く風と言わんばかりに再び端末の操作を再開する達也。

そんなやり取りをしつつも、先ほどの女子二人とも互いに自己紹介を終え（栗色ミディアムショートは千葉エリカ、黒色セミロングボブは柴田美月というらしい）あれやこれやしていたら予鈴が鳴った。

皆、各々の席に座り作業を始める。本鈴が鳴り、オリエンテーションが始まる。



入学二日目にして行動を共にするメンバーが固まったであろう兼たち。

午前中に工房を覗きに行った時は問題なかったが、昼食時に達也の妹であり一科生ある深雪さんが達也と一緒に食事をしようとしたところで多少問題が発生。

グループ内での問題ではなく外からの問題ではあるが……。深雪と一緒にいた彼女のクラスメイト達が遠回し（最終的にオブラートに包む気も見せていなかったが）に兼たちが邪魔だと言ったの

だ。

最初は問題なかったが、一科生の身勝手に傲慢な言い種に沸点の比較的低いであろうエリカとレオが今にも怒りを爆発させそうだった。その時兼は二人を窘め、達也は急いで食べ終わり兼達に断りを入れて席を立ち、その場から離れて最終的な解決とは行かないが場を納めることができた。

その後、深雪は兼達に目で謝罪し、達也とは逆方向に去っていった。午後にも一幕あったものの、こちらは割愛。何故かという悪目立ちしただけだからだ。一悶着あったというわけではない。

放課後、兼達五人グループは一緒に下校する流れだったが、そこで深雪さんが合流した。

そこまでは良かった。問題はその深雪さんにくつついてきたクラスメイト達が難癖を付けてきたのだ。

「いい加減に諦めたらどうですか？ 深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挿むことじゃないでしょう。」

一科生の理不尽な行動に最初にキレたのは、意外にも美月だった。美月は達也たちの前に出て一科生を相手に雄弁をふるっている。それに付き添うようにエリカとレオも一緒にいる。

一方で達也と兼、そして深雪はその少し後ろから状況を見守っていた。

「別に深雪さんは貴方たちを邪魔者扱いなんてしていないじゃないですか。一緒に帰りたいかと思ったら、ついてくればいいんです。何の権利があつて二人の仲を引き裂こうとするんですか。」

美月が言っていることは間違っていないし正論だ。ただ……—
「引き裂くと言われてもな……」

「言ってることは間違っちゃいないが、微妙にずれてる気がするな……」

——達也も兼も、美月の言葉に決定的に何かはずれている気がするのを感じ取っていた。

その隣で深雪は何故か顔を赤らめ慌てていた。

それに気付き、理由を問い質している達也。

「いやあ……青春だねえ……」

そしてすべてを知っているが故に余裕を放く兼、
誰しもが止めに入ろうとしなかった。

場は混沌を極めていた。

言い争いがヒートアップする。感情的に物を言う一科生たち。それを冷静に正論で叩き返す美月達（主にエリカとレオ）。

このまま場が収まるのならいいのだが、それで収まるほど彼らは大人ではない。

「……どれだけ優れているか、知りたいなら教えてやるぞ。」

「ハッ、おもしろええ！ ぜひとも教えてもらおうじゃねえか」

一科生の威嚇とも最後通牒ともとれる言葉を、レオが挑戦的な大声で応じる。

脅しが聞かないと判断したのか、それとも元からやる気だったのか不明だが啖呵を切っていた一科生の男子が不敵に笑いだす。

「いいだろう……。だったら教えてやる！」

腰のホルスターから拳銃型のCADを抜き、レオに突きつける。

特化型CADは格納できる魔方式が少ない代わりに使用者の負担を軽減するサブシステムが備わっている。

それに加えて術者の技量も相まってレオをターゲットとした魔法が一瞬で発動する――

「ヒッ！」

はずだった。

魔法を発動させようとしていた彼の手にCADは無く、地面に落ちていた。

そしてその眼前には、伸縮警棒を振り抜いた姿勢で笑みを浮かべるエリカが立っていた。

「この間合いなら身体を動かしたほうが速いわね。」

一科生の行動を阻止しようと動いていたレオもその意見に賛同しているものの、自分の腕ごと警棒で弾こうとしていたんじゃないかと

愚痴をこぼす。

それに対して誤魔化す気のない愛想笑いでレオを軽く弄るエリカ。一科生を無視して内輪揉めが始まりそうだ。始まる前に別の一科生が行動を起こすわけだが。

「みんなもうやめて！」

彼女が魔方式を起動し始める。

兼は事前の知識から、達也は己が能力で攻撃性の低い閃光魔法だとわかっている。

達也が何かしようとしているのを兼が横で見っていたが、何もしなかった。なぜなら――

「止めなさい！ 自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、校則違反である以前に、犯罪行為ですよ！」

達也が何かをする前に声の主がサイオンの弾丸を撃ち込み、起動式を碎いてしまったからだ。

サイオン弾で魔法の発動を阻止したのは、生徒会長・七草真由美だった。

その隣には起動式の展開を完了させている風紀委員の腕章をした女子生徒――入学式の生徒会紹介の場にいた風紀委員長の渡辺摩利という三年生だ――が立っていた。

（生の七草生徒会長と渡辺風紀委員長を生でここまで近くで見たのは初めてだけど、すごいな七草生徒会長……いろんな意味で。）

一科生達やエリカ達（達也と深雪を除く）が言葉無く硬直している中、兼は新しく現れた二人を真剣に観察していた。

設定や映像で確認して知っていたことではあるが、生で見るとは感じることが違うと……。何がと言わないが。

周りが緊張した空気の中、能天気になんかことを考えることができるのはこの後の流れを知っているからか、はたまた生来の性格ゆえか。

「あなたたち、1―Aと1―Eの生徒ね。事情を聞きます。ついて

来なさい。」

冷徹と言われても仕方の無い硬質な声で命じる摩利。誰も動かない。反抗心からではなく、雰囲気にも呑まれて動けないのだ。

そんな中、その空気を打ち破って達也が深雪と一緒に摩利の前に歩み出る。兼もその後ろを付いていく。

「すみません、悪ふざけが過ぎました。」

「悪ふざけ?」

「はい。森崎一門のクイックドロウは有名ですから、後学のために見せてもらうだけのつもりだったのですが、あまりにも真に迫っていたので、思わず手が出てしまいました。」

レオにCADを突き付けた男子生徒が驚く。

他の一年生も今までとは別の意味で絶句している。そんな中、兼は未だに笑みを絶やさない。

摩利はCADを違法にしようとした一科生の男女二人を一瞥した後、達也を見て冷笑する。

「ではその後には1—Aの女子が攻撃性の魔法を発動しようとしていたのはどうしてだ?」

「驚いたのでしょうか。条件反射で起動プロセスを実行できるとはさすが一科生ですね。」

達也の言っていることに間違いはない。が、年齢にそぐわない冷静さだ。

この場は達也の独壇場となった。摩利が疑問を投げ、達也が返す。達也が展開された起動式を読み取ることができるという人間離れした芸当が可能ということが発覚して場はやや騒然としたが、深雪のアシストと真由美の寛大な温情により事なきを得ることができたのだった。

ちなみに兼は、達也と深雪の後ろでこの出来事に立ち会うことができ、感動していた。

「今回は不問にします。以後このようなことの無いように。」

姿勢を正し、互いに相容れないながらも一斉に頭を下げる一同。達也と深雪、そして兼は慌てることなく頭を下げる。

あとは役員の二人が場を去れば一段落だというところであつたが……。

「君の名は？」

摩利は足を止め振り返りつつ達也にそう問いかけた。

「1年E組、司波達也です。」

「覚えておこう。……後ろの君は？」

達也だけに問いかけたのかと思いきや兼にまで名を問いかけてきた。

「……同じく1年E組、四々舞兼です。」

なぜ自分の名を聞かれたのか全く理解ができない兼であるが、名乗らないという選択肢はないため名乗る。

「四々舞……なるほど。君の名も覚えておこう。悪い意味でな。」

そう言つて、今度こそ去っていく摩利。騒動はこれにて収束した。



「……借りだなんて思わないからな。」

役員の姿が校舎に消えたのを見届けて、最初に手を出した、つまり達也に庇われた形になったA組の男子生徒が、棘のある視線と口調でそう言い放つ。

達也は呆れた顔をし、近くにいた兼もそれが聞こえていたが無表情でいた。気を緩めたら笑いそうになるからである。何故かは察してほしい。

「貸しだなんて思わないから安心しろ。決め手になつたのは深雪の誠意と生徒会長の寛大な温情だからな。」

「お兄様は、言い負かすのは得意でも、説得するのは苦手なのですか

ら。」

深雪のわざとらしい非難の眼差しに対し、達也は苦笑で返す。

「……僕の名前は森崎駿。お前が見抜いた通り、森崎の本家に連なる者だ。」

「見抜くも何も……模範実技の映像資料を見たことがあるだけだ。」

恰好がつかず顔を赤くする森崎。すぐに赤みは引き、達也を一層強くにらみつける。

「僕は認めないぞ、司波達也。司波さん、僕たちと一緒にいるべきなんだ。」

森崎はそう捨て台詞を吐き、達也の返事を待たずに背を向けた。

そのまま立ち去るのかと思いきや、今度は達也の後ろにいる兼に顔だけ向ける。

「お前もだ、四々舞兼。百家の面汚しめ……。」

達也に対する感情とは別のものだが兼にも悪態をつき、その場から去っていった。

「……やれやれ。達也のことはフルネームで呼び捨て。俺に関しては百家の汚点と来ましたか。」

「俺はともかく、兼は仕方がないんじゃないか？ 四々舞の次男がドラ息子だというのは、百家内では比較的有名な話だろう。」

「その百家内では比較的有名な話を、百家じゃない達也が知っていることはこの際置いておくとして……その言い草は酷くね？」

「事実だ、諦めろ。」

達也の容赦のない言葉に兼は項垂れる。

そういえば達也は齒に衣着せぬ発言ばかりだったなと思いつく。傷つきもするが、本心であるがゆえに清々しくもある。

お偉い方の腹の探り合いや張り付けたような笑顔よりも達也の態度のほうが何倍もマシだ。

「……取り敢えずいざこざは終わったんだし、帰ろうぜ。」
達也に口で勝てないと判断し、話題を変える兼。

実際にもめ事は終わり、学校でやる事ももうないので帰ろうという提案自体は自然だ。

「そうだな。深雪、レオ、千葉さん、柴田さん、帰ろう。」

達也が一応この場では兼の提案に乗り、他のメンバーに声をかけ帰路に就こうとするが、行く手を遮るように女子生徒が二人立っていた。

一人は生徒会長に起動式を砕かれて魔法を発動できなかったA組の女子生徒で、もう一人の女子は彼女の隣にいた小柄な少女だ。

達也はこれ以上の面倒ごととは関わりたくないと思っていた。

達也は深雪に目配せし、深雪は兄の意を汲み、また明日、と挨拶して過ぎ去ろうとしたが、それよりも先に相手が口を開いた。

「光井ほのかです。さつきは失礼なことを言っすみませんでした。」

森崎のように悪態をつくのかと思いきや、いきなり頭を下げられて、達也は面食らっていた。

「庇ってくれて、ありがとうございます。森崎君はあ言いましたけど、大事にならなかつたのはお兄さんのおかげです。」

「……どういたしまして。でも、お兄さんは止めてくれ。これでも一年生だ。」

ここで軽く自己紹介等が行われる。

光井ほのかと隣の少女——北山雫と言うそうだ——が駅まで一緒に緒しても良いかと聞いてくる。

先ほどまでのエリート意識を隠しきれていなかった態度から打って変わって大人しい態度になっている。こちらが素なのだろう。

断る理由もないので、二人を加えた計八人の大所帯での帰宅と相成った。六人でも十分、大所帯ではあるが。



駅までの帰り道は、微妙な空気になると思われていたが、兼が率先して話題を振ったり提供する形ではあるが存外に朗らかだった。

「あの時、なんで俺まで名前を聞かれたのかずっと疑問でさ。しかも悪い意味で覚えておこうって……」

「それは確かに気になるな。ってか兼って、結構な有名人なのか？」

先ほどの一件を話題に持ち出し、軽い愚痴を零している。それに対しレオが食いついた。

いくら朗らかな雰囲気とはいえ男女比が明らかに女子寄りなこの場で、無言でいるのは居心地が悪い。

それにあの時に達也の後ろで何もしていなかったであろう兼に摩利が興味を示したのも気になるのだろう。

「理由は簡単だよレオ。兼はあの状況で一人だけ気を緩めていた。場違いなほどにね。」

「それに四々舞君は、あの状況下ですつとにやけていましたものね。目立っても仕方がないかと思えます。」

達也と深雪の指摘に、兼と司波兄妹を除く五人の視線が兼に刺さる。いたたまれない。助けて。

「いやあ……あんな状況に身を置かれたことがなくてな。すまん。」

「限度があるだろう。そんなだから素行が良くなったであろう今でもドラ息子の悪名が収まらないんじゃないか？」

達也のおっしやる通りです。事故に遭って以降、兼は真面目に勉強に励み鍛錬を積んだことにより、ドラ息子の悪名は一旦収まった。

がしかし、前世に比べて発展している世界に興奮し、時折不自然な行動を取っていたために悪名が完全に消えずに残っているわけである。自業自得でもあるが。

「……兼君の苗字は四々舞って聞いたけど、もしかして四葉の関係者……だったりするのですか？」

何気ないがとても突っ込んだ質問を、ほのかが訪ねてきた。四葉は魔法師界限では恐怖の対象だ。無理もない。

「あー……答えはノーだ。よく聞かれるが四葉家とは無関係だ。」

「そうですね。同じ数字だからって関係があるとは限らないですもんね。」

実際は関係者どころか分家だが、教えることができるわけがない。嘘をつくことになるが背に腹は代えられない。

「レオが聞きたがっている兼が有名か否かだが、悪い意味で有名人だぞ。」

「悪い意味？ さつきもドラ息子がどうか言っていたが、それが関係しているのか？」

レオの無邪気の一撃。兼はダメージを受けた。

「ああ。理解を深めるためにはまず四々舞家の話をする必要がある。四々舞家は兼の父親、三代目当主四々舞武雄たけお氏が第三次世界大戦で活躍したことにより有名になった一族だ。」

兼の悪名のスケールを理解してもらうために四々舞家のあれこれから語り始める達也。

「武雄氏には三人の子供がいる。長男の四々舞家剣つるぎと長女の四々舞沙耶さや、そして末弟の四々舞兼だ。」

「おう、俺だぜ。」

「……長男と長女は双子で一高の卒業生だ。九校戦でも活躍している。父親の活躍や長男長女が世間で褒め称えられる中、兼は四々舞家の汚点と言っていていいレベルで墮落していたんだ。」

話の途中で茶々を入れたのが悪かったのだろう。達也の俺に対する口撃（誤字に非ず）がえげつないです。

このままじゃマズいと判断し、兼は弁明する。

「た、確かに俺はろくでなしで人でなしだった。が、それも三年前までの話だったんだよ。」

「三年前……何か変わるようなきっかけになる出来事があったのか？」

「いや、ただ交通事故で生死を彷徨っただけだよ。」

軽いノリで気楽に話したがそれでも少し空気が重くなってしまった。

「この空気を壊して達也さん！ と言わんばかりに兼は視線を向ける。」

「兼は交通事故から退院した後から、変わったとよく言われている。一時は記憶喪失になったのではと言われたくらいだよ。」

「記憶喪失なんてなったら生活できないっつーの。拾った命を無駄にしないように悔いなく生きようと思ったただけだ。」

達也の辛辣なコメントに批判交じりに反論する。

まあ、本人あそこで死んでるんですけどね！

「とまあ、事故ってから今に至るまでは真面目に勉学に励んで魔法もすっかり覚えて、晴れて今ここにいてるってわけさ。一科生になれなかったのは残念だったが、レオや達也たち友人に恵まれたから二科生でも悪くなかったと思ってるぜ。」

「話がずれているぞ。その事故を区切りに過去の悪名は薄くはなったが、時折不自然な行動をするため未だに四々舞家のドラ息子の肩書が消えていないというわけだ。」

いい話風に纏めようとしたが達也に阻止された。解せぬ。

「というわけで、昔と違って素行は悪くないが偶に奇行に走るからまだ悪名が残ってるわけだ。しかも厄介なことに真面目になる前の悪名が今なお語り継がれているというね。」

三年も経てば情報が更新されてもいいと思うんだけどなあ。と遠い目をする兼。

「えーつと……つまり兼はその噂と違って真面目だが偶に変なことをするから悪名が消えず、まだ悪い意味での有名人ってことでいいんだな？」

「ああ。概ねその認識で間違いない。」

レオのざっくりとした要約に達也が肯定する。

ざっくりしすぎて女子組が苦笑するレベルだ。

そんなこんなで兼の悪名の由来を語っていたらあつという間に駅に着いた。

ここで皆解散し、各々の帰路へと付くのがだった。



その日の夜。兼は自室にて考え事をしていた。

明日以降の出来事に対する干渉の有無だ。

達也の風紀委員入りの話に友人らは混じることはない。そもそも干渉していい部分なのか……。

ある意味ではこれは今後の動きを大きく左右する出来事だろう。

そこにただの二科生でしかも達也とは別の意味で悪目立ちしている兼が茶々を入れようものなら話が余計こじれる気がしてならない。

「だぁー！ 考えがまとまらん！ 寝る！」

兼は考えるのをやめた。話の流れは完璧に覚えているからその時その時で対処すればいいだろうと開き直ったのである。

布団に潜った兼はすぐに眠りについた。

兼が動かずとも周りが勝手に兼を巻き込むこともあるということ
を、兼は選択肢の中から除外していた。

自分はイレギュラーな存在だからとその可能性を排除していたた
めである。

翌日、その考えが否定されることになるとは夢にも思わないだろ
う。

登校中にまたもやレオと合流。

この調子でずっとレオと一緒に登校していると二人で一緒にいることが当たり前なのだと思われそうだ。

それが嫌なのかと言われるとそうではないが、一人で動きにくくなる可能性がある。そのあたり気を付けるとしよう。

そう考えながらレオと他愛のない会話をしながら登校していると――。

「やあ四々舞。おはよう。」

後ろから右肩に手を置かれながらあいさつをされた。

挨拶してきた声は女性のものだった。そしてこうも気さくに話しかけてくる女友達はいない。考えたくもないが考えられる答えは一つ。

半ば諦めつつ、右肩に乗せられた手の方向を見る。

「……おはようございます。渡辺風紀委員長。」

そこには先日いきなり悪い意味で目を付けられた人物。渡辺摩利がいた。

「すまない。ご学友を少し借りてもいいかな？」

「あ、はい。どうぞ。」

「あっ！ レオお前、俺を見捨てるのか！」

先輩後輩の立場などもあるだろうがレオは先日の一件で少し彼女に苦手意識が芽生えているようだ。

「じゃあ俺は先に行ってるぜ。また教室でな！」

「レオ！ 置いて行くな！ レオー！」

兼の悲痛な叫びは届かず、レオは足早に学校へと向かってしまった。

「酷いじゃないか。先輩が可愛い後輩と話をしたかっただけだと言うのにその態度は。」

「前日に何もなければ問題なかったですよ。それに話をしたいって……詰問するの間違いじゃないですか？」

摩利の昨日の反応を考えるに、会話をしたがるかと言われると怪しいものだ。

俺の不審な行動に対して疑問をぶつけてくる方がしっくりくるだろう。

「登校中では聞けることも限られるから手短に聞くぞ。」

「……お手柔らかにお願いします。」

渡辺先輩の表情と声色が真剣なものになったので、兼はふざけた雰囲気やすぐに引つ込めた。

どちらにしても、ここは駄々をこねて時間を延ばすよりさっさと答えてお引き取り願う方が早く解放されるだろうと判断する。

「昨日のお前はずつとにやけていたが、あれには理由があるのか？」

まあ、聞きますよね。俺が摩利さんの立場だったとしても聞いている。だって不審だもんね。

言い訳というわけではないがいつか聞かれるかもしれないと思い、いくつか回答を用意していたのがこうも早く役立つときが来るとは……。

「いいえ、深い意味はないです。あれだけ派手に騒いでいたので、大事になる前に仲裁役が来るだろうと楽観的に考えていただけですよ。」

当たり障りのない無難な回答。無難すぎて興味を失ってもらえるといいなと期待したが、この理由だけでは摩利は納得してくれなかった。

「本当にそれだけか？ 仮に私達の到着が少しでも遅ければ君たちの誰かが魔法の攻撃対象になっていたあの状況で？」

「それだけですよ。それに、一度死にかけた自分としてはあんなの可愛らしいものじゃないですか。」

無難な回答でダメなら奇を衒てらう且つ納得されるであろう回答をする。

「なるほど……。君らしい回答だな。」

理解はできないが納得はするといった表情で苦笑いされる。

月並みな回答じゃ貴方が納得しないだろうからこういう回答したんだけどなあ……。

俺は誰かさんと違って言いくるめのスキルは持ち合わせていませんので。

「……ふむ、よし。四々舞、今日の放課後に生徒会室に來い。これは風紀委員命令だ。」

突然そんなことを言い放つ摩利。

どうしてそんなことを言い出だしたのかを聞こうと思ったが、残念ながら時間切れだ。学校に着いてしまった。

摩利は待っているぞと言わんばかりに片手をヒラヒラと振って校舎に向かう生徒たちの中に消えていった。

「放課後ねえ……。」

放課後は達也と生徒会副会長の服部先輩による模擬戦があるから時間次第では生徒会室は空になるだろうなあ……。

「……先回りしとくか。たしか、第三演習室だったよな。」

今日の昼休みは校舎の散策になりそうだな。と考えながら兼は自分の教室に向かうのだった。



昼休み後の授業——据え置き型のCADの操作を習得するガイダンスだが——の最中、達也は昼食時の生徒会室での顛末を話していた。

ちなみに兼が生前の記憶を抜きにして達也が生徒会室で昼食をとることになったのを知っているのは、朝礼前にレオから聞いたからである。

「そんで？ 生徒会室で綺麗な女性陣に囲まれて食事を採っていた達也殿はどういう経緯で風紀委員になれと言われたのかな？」

からかいながら話の続きを促す兼。普段ならこの手の話題に食いつきそうなエリカだが、今回はあまり話に乗ってこない。

「囲まれていたことに関しては否定しないが、寧ろ男一人だけだったから居心地が悪かったぞ。」

呆れ気味に返す達也。それもそうだろう。達也は一つだけの例外

を除いて感情の強い衝動を失っているのだから。

それを知るもからすれば達也の言葉に納得するだろうし、知らなければ達也の言葉はまた別の意味に聞こえてくるだろう。

「それにしても達也も難儀なもんだな。今朝は兼がその風紀委員長殿に捕まってたぜ?」

「俺を置いて行ったやつがよく言うぜ……。」

レオの同情の言葉に兼が突っかかる。実際置いて行かれたのだからこれくらい言ってもバチは当たらないだろう。

「兼君は何か悪いことをしたのですか?」

無邪気な美月がレオの言葉を鵜呑みにして兼に問いかける。

まあ、レオの言ってることは一言一句間違っではないが。

「何も悪いことはしてないよ。先日的一件で軽く質問されたんだ。」

「お前さん、あの時に覚えられてたもんな。」

「うっせ。」

意趣返しと言わんばかりにレオが茶化す。

そのあと、達也が放課後生徒会室に呼び出されている話をしつつ、会話に交じってきたエリカとレオと兼がギャーギャー言いつつもカリキュラムをこなしていたらいつもの間にか終了時間になっていた。



放課後、兼はみんなと別れ第三演習室に向かった。達也と服部副会長の模擬戦を見るためだ。

とはいえ模擬戦が始まるまで少し時間がある。どうやって時間を潰したのか……。

「最近は何も興奮続きで寝てもあんまり疲れが取れてなかったからなあ……。仮眠でも取るか。」

第三演習室前に到着したものの、待っている時間が思いのほか長くなったために、演習室の扉の前に片膝を立てて眠りこけ始めたのだっ

た。

「早く見たいなあ……達也の生模擬戦……ぐう……」

早くも夢の世界へ向かう兼。演習場に人が来たら間違ひなく不審者扱いだろう。

だが、幸運にも達也たちが到着するまでに兼が誰かに見つかることはなかった。

しばらくして――

「――い――おい。起きろ！ 四々舞、起きるんだ！」

時間にして三十分も経っていないだろう。その割にはぐっすり熟睡してしまったようだ。

誰からかの大きな声で起こされるのを感じながら目を覚ます。

「ふああ……。んー……。」

「四々舞……お前は一体ここで何をやっているんだ？」

声の方に顔を向けると、摩利が腕を組んで蟬谷こめかみに青筋を浮かべていてもおかしくないような表情で兼を見下ろしていた。

その後ろでは厳しい目をしている服部副会長と呆れた顔をしている達也。

彼は誰なのか？という顔をしている深雪に七草先輩、そして市原鈴音先輩と中条あずさ先輩だった。

「……渡辺風紀委員長殿？」

「ほう……。寝ぼけて私のことを母呼ばわりしなかっただけ誉めてやろう。」

「ど、どうも……。」

「だが、それとは別にお前は どうしてここにいるんだあ？」

ヤバイ。風紀委員長殿が爆発寸前だ。どうにかしないと……。

後ろにいるメンバーで唯一面識のある達也にアイコンタクトで救助を要請するも、達也は横に首を振る。

(達也！ 助けてくれ！)

(助けるも何も……そもそも俺はお前がここにしている理由がわからない。弁解するにしても理由がわからないのであれば助けようもない。

諦める。」

そのような無慈悲な宣告をされた気がする。どちらにしてもこの場面は俺一人で切り抜けるしかない……………」

「えーつとですね…………。そ、そうです！ 校舎内の散策をしていたんですよ！ 校舎を自分のペースで散策するのもいいかと思ひ、ウロウロしていたわけですよ。」

「なるほど、入学したての君だからこそ納得のいく理由だ。だが……散策していただだけの君がどうして演習室前で眠ってるんだ？」

まあ、聞かれるよね。寝るなら寝るで自分の机か図書室だろうし。だが、咄嗟ではあるが言い訳を思い付いたから問題ない！ ……はず。

「あー…………えーつと…………。そ、そう！ ここを張ってたら模擬戦見れるかと思っていたんですよ！ それで、ここで待機してたら眠たくなってきました…………。」

「演習室前で眠っていたと。ほおーう…………。」

怪しまれている…………。むしろこの状況で怪しむなってほうが無理な話か…………。

「ところで…………どうしてこうも揃いも揃って演習室に？」

「演習室に来たんだ。目的は一つだけなのはわかってるだろう？」

兼への非難を回避するために話を逸らしてみたら、摩利はあっさりその話題に乗ってきた。

好戦的な性格なのだろう。早く模擬戦を見たかったのかもしれない。

「誰と誰が模擬戦を？」

「服部副会長と司波達也だ。」

あ、そこも喋っちゃうんですね。

後ろで七草先輩と市原先輩がやれやれといった感じで少し呆れている雰囲気を出している。

「…………模擬戦を見学しても？」

「ふうむ…………服部副会長殿と達也君はどうしたい？」

まあ、そうだよな。模擬戦をする本人たちが決定権を持っているの

は当たり前だ。

了承してくれるだろうか……。

「私は構いません。資料として映像で見るよりも、生で見たほうが感じるものが多いでしょう。」

「俺も別に構いませんよ。」

二人とも二つ返事で了承する。服部先輩が断るかもしれないと思ったが、二科だからと言って向上心のある生徒を蔑ろにするようなことはしないみたいなので少し安心した。

よし！ これで達也の模擬戦が生で見れる。

「ありがとうございます。あ、自分のことを知らない方もいらっしゃるので一応自己紹介を。私の名前は四々舞兼と言います。よろしくおねがいします。」

「四々舞……ああ、君が四々舞兼君ね。」

と、ここで七草先輩が会話に参加してくる。

七草先輩とはまだ接点はなかったはず……渡辺先輩経由か、それも独自のコネクション？

「あなたも達也君ほどではないにしても、筆記試験は上位10人の中には入っていたわよ？」

「そ、そうなんです……。ありがとうございます。」

入学試験の結果は普通は公表されない。彼女は生徒会長権限なのか独自の伝手を使ったのかわからないが、入学者の成績を知っていた。

まあ、それはこの際どうでもいい。問題は兼の成績の方だ。

兼は実技も筆記試験も両方とも入学できるが一科生にならないように手を抜いていた。それにもかかわらず兼の成績は上位に位置していたのだ。

「摩利からも話は聞いているわ。からかい甲斐のある後輩を見つけたってね。」

「渡辺先輩！ それどういうことですか！」

入試結果のことで考えを巡らせていたところにまさかのおもちや発言。思わずそつちに話題が言ってしまう。

「……さて、何のことやら。それよりも、演習室の使える時間も限られている。さつきと模擬戦の準備をしなくてはな。」

「あ、ちよ。逃げないでくださいよ！ さつきの話はということかはつきりしてくださいよ！」

演習室に入っていく摩利と兼。事の発端は兼が演習室前で眠っていたことが始まりだが、それ自体は有耶無耶になった。

がしかし、七草先輩の一言により兼の中で別の問題が発生して問い詰める立場が逆転した。

「……さて。あの二人は一先ずおいておきましょう。二人とも、模擬戦の準備をお願いね。」

そう締めくくり、演習室に入っていくある意味で元凶の七草先輩。

服部は渡辺先輩のおもちやにされるであろう兼を同情し、達也は面倒ごとが増えたなど呆れ、二人同時に溜息をつきながら演習室に入っていくのだった。

兼と摩利が騒いでいることを除けば模擬戦の準備は恙なく進んだ。
服部先輩はリストバンド状のCADを、達也は拳銃型のCADを装備し定位置に移動する。

審判役をするからこそから離れると摩利に言われたため、渋々問い詰めるのを中断した兼が真由美たちの方へ向かう。

「……結局はぐらかされてしまった。」

「見てて面白かったわよ?」

「そりや当人たちでなければあの光景はさぞ滑稽でしたでしょうね……。」

七草先輩にからかわれるものの、反応する気力もない兼は疲れたと言わんばかりに溜息をつく。

「私も貴方とはお話したいと思っていたのよ。」

「え、俺と七草先輩はこれと言って繋がりはないですよね……?」

「まあまあ、詳しいことはこの模擬戦の後にね?」

渡辺先輩に続いて七草先輩先輩にもはぐらかされてしまった。

とはいえ目の前の模擬戦に集中するべきなのもまた事実。聞いたことが山ほどあったが一旦保留して、達也と服部先輩に視線を向ける。

二人とも準備を終え、すでに定位置にいる。後は試合開始の合図を待つばかり。

「ねえ、四々舞君。どっちが勝つと思う?」

とても気さくに七草先輩が話しかけてくる。ここで深雪じゃなく兼にどちらが勝つかを聞いたのはこの中で一番中立的、というより二人の実力を知らないだろうから聞いたのだろう。

深雪だと兄が勝つと断言するだろうし、七草先輩達も服部先輩の実力を知っているが故にどうしても服部先輩のほうに意見が偏るのだろう。

威厳(?)をもつて話しかけてくるのではなく、気さくにそして碎けた感じに話題を振ってきたことに疑問を少々抱いたが、その疑問は

一旦頭の隅に置き、七草先輩の質問に答える。

「そうですね……。達也が勝つんじゃないですか？」

「どうしてそう思うの？」

「この試合を提案したのって達也なのでしよう？　なら、勝算があるから吹っ掛けたんだと思いますよ。」

「その勝算というのがどのようなものかわかる？」

「さすがにそこまでは……。そういえば彼は実技が得意ではないって言っていましたので魔法以外の部分で初見殺しの技を持っているのかもしれないですね。」

「なるほどね……。」

二科生の、しかも問題児として悪名を轟かせている兼の意見を真面目に受け止める七草先輩。

憶測で物を言っているが一応筋は通っているように聞こえるからだろうか。

ちなみに、達也が模擬戦を使用と提案したことは渡辺先輩から二人で騒いでいる時に聞きました。

「でも魔法の発動のほうが速いとはいえ、近接格闘による攻撃ははんぞー君も警戒していると思うけど、その所どうお考えで？」

「さすがに達也も馬鹿正直に近づいて殴る蹴るはしないんじゃないでしょうか？　先輩の言う通り基本的に魔法を発動させる方が体を動かすより早いですし。」

なお、例外として至近距離だった場合は人にもよるが格闘戦のほうが速かったりする。前日の諍いの時のエリカがいい例だ。

「じゃあ達也君は何を隠し持ってると思う？」

「うーん……。俺がこの状況で欲しい技術と言えば瞬歩等の意表を突くタイプの身体操作技術ですかねえ。達也がそれを持っているかどうかは知らないですけど。」

ぶっちゃけほぼ答えを言っているようなものです。本当にありがとうございます。

誘導尋問をされている気がしないでもないが、この際気にしないでおこう。下手に反応すると七草先輩にまで玩具にされてしまう。

達也たちを見ると今は渡辺先輩によるルールの確認をしている途中だ。つまり、もうすぐ始まる。

「——このルールに従わない場合は、その時点で負けとする。あたしが力づくで止めさせるから覚悟しておけ。以上だ。」

両者ともに頷き、五メートル離れた開始線で向かい合う。後は合図を待つばかり。

待つこと十数秒。演習室が静寂に包まれ、服の擦れる音がやたら大きく聞こえる。

「始めっ！」

服の擦れる音すらしなくなった完全なる無音の状態になった瞬間、摩利の開始の合図が演習室内に木霊する。

服部は淀みなくCADに指を走らせ起動式を展開し、達也を標的に魔法を発動させようとする。

対する達也は人が出していないのか疑問なレベルの速度で服部に肉薄する。

そのあと彼の背後に接近するのと同等の速度で移動し、魔法を発動する。

決着は十秒もせずについた。

「……勝者、司波達也。」

摩利による勝ち名乗りは、驚き故か控えめだった。

現代魔法師の模擬戦は魔法の特性上、早く魔法を発動させた方が勝ちやすい傾向なため、短期決戦が多い。

しかし、初めて模擬戦を見るとはいえ今回の模擬戦はあまりにも早すぎるのではないか思う。

それに加えてあの人間離れした動きだ。ギャラリーは驚くしかないだろう。

達也は軽く礼をし、自分のCADを格納していたケースに向かって歩いていった。

「待て。」

呆気にとられていた摩利が冷静さを取り戻し、達也を呼び止める。

「今のは、あらかじめ自己加速術式を展開していたのか？」

そんなことがないとわかっていても聞かずにはいられなかった。ギャラリーとは違い、摩利は二人の相子の流れをじっくりと注視していたからだ。それも手に持っているCAD以外にも隠し持っている可能性を考慮した上でだ。

「そうでないことは、先輩が一番理解していると思いますが。」

「わたしも証言します。あれは、兄の体術です。兄は、忍術使い・九重八雲先生の指導を受けているのです。」

九重八雲という名は対人格闘に長じる摩利には有名すぎる名前だった。その手の情報に詳しくない真由美たちでも知っていることからビッグネームである事がうかがえる。

「君は本当になんというか……規格外だな。」

摩利のその一言がここにいる人間——達也本人と深雪を除く——の心境を表していた。

服部の背後に回った技術に関しての種明かしは終わったが、服部を昏倒させた魔法に関しての種明かしが終わっていない。

しかし種は勿体ぶることなく明かされる。

サイオンの波動、波の合成、ループキャスト、シルバーホーン、多変数化等々。

自分の魔法力の低さをCADで補っていることや魔法力の評価としてはずれている部分で技能が突出していることが明かされた。

「……テストが本当の能力を示していないとはこういうことか」

気を失い、壁を背にして座らせていた（兼が摩利に先輩権限でやらされた）服部が、呻き声をあげながら半身を起こしていた。

その後服部が真由美と鈴音に弄られるという一幕があったものの、服部が自分の非を認め深雪に謝罪し和解した。



「さて、色々と想定外のイベントがあったが、当初の予定通り委員会本

部へ行こうか。」

事務室にCADを預け直し、達也が再び訪れると、摩利に腕を捕られていた兼の姿があった。

「あのー……。どうして俺は渡辺先輩に捕まってるのでしょうか」

「そりゃ君に逃げられないようにするためさ」

摩利の言い分だと、放課後に生徒会室に来なかったことに不満があるようだった。

確かに来いと言われてたから、行かなきゃなーとは思ってましたよ？

ただ模擬戦があったから、タイミング次第ではすれ違いそうな気がしたんだよね。

「いやあ……。行こうとは思っていましたよ？　ただ、その前に誰かが模擬戦やってないかなーって軽く除きに行ったんですよ。」

「で？　演習室前で待機してたら眠くなったので目を閉じたらそのまま寝ちゃったということか？」

「せ、先輩？　すごくいい笑顔ですけど目が笑ってないですよ？」

先輩が怒るのもわかる。約束を反故にされたのだからそれも当然だろう。

「で、でもタイミング次第じゃ俺が生徒会室に行っても誰もいなかったかもしれないじゃないですか。」

「それは結果論だ。約束を破っていい理由とはならないぞ！」

摩利が兼の腕をつかむ力を強める。地味に痛い。

何とか振り払おうとするもびくともしない。

「先輩！　痛い！　痛いですって！」

「痛くしているのだ。当然だろう。この程度で済んでいるのだからありがたく思え！」

摩利が腕に入れている力を緩める。が、腕は放してくれない。

兼は諦めて摩利に腕を掴まれたまま風紀委員会本部まで連行された。

そしてその後ろでは、達也が溜息をつきながら二人の後を追うのだった。



「ここが風紀委員会本部だ。少し散らかっているが、まあ適当に掛けてくれ。」

この言葉は達也に対して発した言葉である。兼は未だに摩利に腕を掴まれたままだ。

しかし、適当に掛けてくれと言われたが、この部屋は座る場所自体はあるものの長机の上は書類や本やCADなどで埋め尽くされている。

綺麗に整頓されていた生徒会室を見た後にここを見ると少しという表現に少し抵抗があった。

「……委員長。ここを片付けてもいいですか？」

どうやら魔工技師志望の達也にとって整理整頓されずに乱雑に放置されているCADなどが我慢できないようだ。

「俺も片づけを手伝うのでそろそろ放してもらえませんかね……もう逃げませんから。」

「……いいだろう。この量を捌くには一人では大変だろうからな。」

頭数に摩利がカウントされていないのはつまりはそういうことなのだろう。

渋々といった感じではあるが、摩利は兼を掴んでいる手を放す。

これを機に俺と達也は整頓を開始する。

達也は書類の仕分けを中心に、兼はCAD周りを点検しつつ書類を整頓していく。

「こういうのは苦手だな……整理整頓がしっかりできる者が委員会入りしてもらえるのは大歓迎だ。」

摩利は開き直ってしまった。

「そういうえば、君をスカウトした理由だが……そういうえば、さつきほとんど説明してしまつたな。未遂犯に対する罰則の適正化と、二科生に対するイメージ対策だ。」

「覚えています、イメージ対策の方はむしろ逆効果ではないかと。」

書類の整頓と本の整理を終え、兼の端末とCADの整理に合流する。

兼の整頓能力は人並みで整頓は進んでいるものの、達也に比べれば遅いものだ。

そこに達也が合流することであつという間に端末とCADの整理が進んでいく。

「確かに、ある程度の反感はあるだろうな。しかし、その対策は考えている。」

「対策というのは？」

「君の隣にいる人物だよ。」

そう言つて摩利は兼を指差す。

「……はい？ え、渡辺先輩それは一体どういうことですか？」

「そのままの意味だ。四々舞にも風紀委員入りしてもらおう。」

「初耳なんですけど！」

なぜこんなことになつたのか意味が解らない。

そもそも風紀委員の枠の残りは生徒会選任枠と教職員推薦枠の二つしかなかったはずだ。

「生徒会選任枠は達也なのでしよう？ 教職員推薦枠も二科生の俺が選ばれることは考えにくい。どの枠で俺を風紀委員に任命するつもりだつたのですか？」

「確かに、教職員推薦枠には君たちと揉めてた森崎が入ることになっているな。」

その言葉にCADを柵に片付けていた達也が驚きの表情をする。

摩利はその顔を見て少し意地の悪い顔になつたが、すぐに元の表情に戻る。

「昨日、騒ぎを起こしたことも考えると推薦取り下げもできたが、もう片側の当事者の君を風紀委員入りさせるんだ、向こうだけ取り下げるとも不公平というものだろうか？」

これはわかる。だが、兼の枠は一体どうなっているのかを聞いた

「それで兼はどの枠で風紀委員入りするかだが、風紀委員長選任枠だ。

今年から一年生限定で素質のあるやつを風紀委員長である私の一存で任命するという枠だ。」

「……その枠で達也を入れるという選択肢はなかったのですか？」

「それも考えたが、四々舞も十分素質はありと睨んでいたからな。おまけに四々舞家の武術を修めている。荒事向きだとは思わないかい？」

摩利はそう笑顔で語る。言ってることは分からないでもない。ただ、風紀委員長選任枠なんてものがあるなんて……想定外だ。

「……拒否権はありませんか？」

「ないわけではないが、君にもいい話だと思うのだがね。君の噂は私の耳にも入ってきている。だから、風紀委員として真面目に活動していたら噂の方も払拭できるのじゃないか？」

悪い話ではない。兼の任務は達也と深雪の護衛だ。達也と深雪の近くで活動できる口実があると言うのは悪くない。

行動が制限されるかもしれないが背に腹は代えられないか……。

「……わかりました。同級生らに噂をどう捉えられようが構いませんが、教員には良い印象を持つてもらうことに越したことはありませんからね。」

「君なら承諾してくれると信じていたよ。因みに、風紀委員をやったからといって学校外での高評価には繋がらないからな？」

「わかっていますよ、風紀委員が名誉職だということは。承諾に関しては俺も達也同様に選択にが無かったように感じましたけどね……。」

肩を落としてつつ端末の整理をする兼。

達也はそれを見て苦笑する。

「互いに頑張ろう、兼。」

「……ああ。改めてよろしくな、達也。」

兼の中で、摩利の被害者の会がここに結成したように感じていた。

黙々と片づけをしていると、生徒会室との直通階段から真由美が降りてきた。

「……………、風紀委員会本部よね？」

「いきなりご挨拶だな。」

「だって、リンちゃんにあれだけ口酸っぱく言われてたのに片付けなかつたじゃない。」

様変わりした風紀委員会本部を見て、目を丸くする真由美に摩利が抗議の言葉を放つ。

が、真由美にも驚くだけの理由がしつかりとあつたようだ。

「片付けなかつたのじゃない！ 片付かなかつたんだ！」

「それ、男とか女とか以前に人としてまずいと思いますよ……………」

あまりにもひどい発言に思わず兼がツツコミを入れてしまう。

「む。四々舞は目上に対する礼儀がなつてないなあ？ これは仕置きが必要か？」

「ほどほどにしなさいよ？ この間、剣先輩と沙耶先輩から兼君のことを頼むって言われたばかりでしょう？」

「え、それ初耳なんですけど生徒会長！」

寝耳に水とはまさにこのことである。俺のことをどうして気にかけてくるのかと思つてはいたが、まさか兄と姉が関わつていたのか。

「あら、てつきり頼まれたことを知つているのかと思つたわ。」

「知つてるわけではないでしょう……………。兄さんも姉さんも俺のことを猫可愛がりしてきますが、まさかここまでとは思いませんでしたよ……………」

兼が事故に遭う前の記憶を辿ると、それはもうこれでもかというほど二人に甘やかされていたのだ。

事故以降は人格が変わつたこともあり、それからは過度の甘やかしはほんのりと断り、本当に必要な物だけ頼つたりしていた。

その結果、必然的に兄達は兼を甘やかす頻度が減り、欲求不満になつていた。

直接的な甘やかしは減つたが遠回しな甘やかしや根回しは増えた

が、その結果の一つがこれだったようだ。

「頼まれたときは驚いたわよ？　かの有名な問題児の面倒を見て欲しいって言われたのだからね。」

「あの時は、ただのクソガキでしたからねえ……。」

「そうね。頼むと言われた日以降、あなたの情報を出来るだけたくさん集めたわ。」

「悪ガキの弱みを握ればコントロールは容易いでしょうからねえ。心中、お察しします。」

真由美が情報を集め始めた当初は噂に違わぬ問題児だったのだが、事故を境に問題行動がほぼなくなっていることにも気づいたのだろう。

「とある事をきっかけに四々舞兼という人物の人物像が大きく変わったわね。まるで別人なんじゃないかってくらいに。」

「そんな大袈裟な……。確かに事故に遭ってから問題行動をあまり起こしてはいませんが。」

事故に遭う前の兼の人となりは、まさに『人でなし』という表現がぴったりなほど酷いものだった。

その内容を語りだしたらきりがないので割愛するが……。

「ま、そんなことがあって最初は警戒してたけど今はその必要はないと判断しているわ」

「それは助かります。」

「でも、剣先輩達に任されていることを止めるわけじゃないから様子を時折見るからね？」

いい笑顔でそう答える真由美。この時兼は、この人達のおもちゃにされるのか……と悟る。

「……もしかして、俺が風紀委員入りしたのって。」

「そういう側面もあったが、それだけじゃ風紀委員に入れたりしない。そんなことをしているのは職権乱用だからな。」

「あなたの情報を集める過程で身体能力や魔法力に問題がないことは確認済みよ。」

そこまで調べられていたのか。恐るべし七草ネットワーク。

「その上で質問なのだけど。どうして二科生なの？」

「どうして……とは？」

「さっきも言ったけど、兼君のことを調べた結論として貴方の学力と魔法力を考えると一科生でも上位に入れないわけがないのよ。」

相手の魔法のことを聞くことは本来マナー違反であるのだが、兼のことを前々から調べていた真由美には彼が二科生という事実が納得できていないのだろう。

兼はどう誤魔化そうか考える。

「……七草先輩が俺の実力を過大評価していたとは思わなかったのですか？」

「考えなかったわけじゃないけど……私が調べた情報が間違っていない限り、どう低く見積もっても一科生入りは確実なのよね。」

「言っちゃなんですけど、それこそ情報に誤りがあった可能性は？」

「うーん……。剣先輩と沙耶先輩から仕入れた情報だからそれはないと思うのだけれど……。」

「兄さんと姉さん……。」

兼のことが好きすぎるからって情報そんなにホイホイ渡さないで欲しい……。

やばい情報は渡してないだろうけど、俺のプライバシーというものが皆無だよ……。

「……あまり大きな声で言えるようなことじゃないのでオフレコで頼みますよ？」

「ええ、わかったわ。」

「では、お耳を拝借して……。」

本当のことは言えるわけない。もしもの時に用意していたもう一つの理由を真由美に話すことにする。

摩利に聞かせても問題は無いが、達也に聞かれるのは後ろめたく感じる。

摩利だけを除け者にはできないだろうから理由を聞かせるのは真由美だけにする。

(それに、もしこの情報が深雪さんの耳に入ろうものなら不興を買い

かねない。教える人間は少ないに越したことはない。」

というわけで、真由美の耳元に手を当て他の二人に聞こえないようにする。

元々この手の話はデリケートな内容なだけに摩利も何も言っていない。

やけに上機嫌な真由美。だが、申し訳ないことに兼が二科生であることに特別な理由はない。

「それで、どういう理由なのかしら？」

「一言で行ってしまえば面倒だった……ですかね」

「め、面倒だった？」

「考えてもみてください。俺は次男坊で当主になるわけでもない。だからといって何もしないのでは家の名に傷がつく。」

「だから二科生として入学して、魔法師としての才能はあるけど並程度として、程よく生活しようってこと？」

真由美が複雑な表情をしつつ察する。

なまじ優秀だと家名のこともあり、政治的なものに関わる機会が出てくるだろう。

それを防ぐために敢えて自分の能力を低く誤魔化している。

理解が速いのは、真由美が同じことを考えたことがあるからかもしれない。

「まあ、凡そそれで合っています。後は悪目立ちを防ぐつもりでしたが……」

「風紀委員になった以上、これ以上に無いくらい目立つわねえ。」

「俺の努力は一体……手を抜いて尚且つ二科生として合格するのは地味に大変だったんですよ。」

常に全力で生きていてはガス欠を起こしてしまう。程よく手を抜いて世渡り上手である方が世の中生きやすいのだ。

「父はこのことを了承しているので俺の独断ではありませんからね？」

「まあ、私よりも兼君のお父様のほうが貴方の力量を把握しているでしょうからそれは当然よね。」

「そういうわけです。このことは誰にも話さないでくださいよ？ 話したところで意味はあまりないでしょうけども。」

「わかったわ。」

実力を偽って順位を上げている場合は問題だが、手を抜いて順位を下げている場合は基本的にメリツトはない。

仮に誰かに話したところでそこまで深刻な問題にはなりえない。

兼は真由美の耳元から離れ、達也と摩利の様子を確認する。

二人は本部の整頓を終え、書類の電子化を行っている最中であった。実際は達也が書類の電子化をして摩利はそれを眺めているだけだが。

「そういえば、七草先輩はどうしてここに来たのですか？」

「様子を見に来たというのもあるけど、もうすぐ生徒会室を閉めるからそれを伝えに来たの。」

「了解です。二人にもそう伝えておきます。」

そう言って生徒会室に戻っていく真由美。

達也たちの方を確認すると、向こうも一段落終わり切り上げようとしているようだ。

丁度よかったので真由美からの言伝を話す。

「わかった。それならここももう閉めてしまおう。」

そう言って端末の電源を切り生徒会室のほうに戻る準備をしていた時、階段側の扉ではなく廊下側の扉が開き、二人の学生が入ってきた。

風紀委員の腕章をしているのをしていことから、巡回から帰ってきたのだろう。

「……もしかしてこの部屋、姐さんが片付けたんで？」

「姐さんって言うな鋼太郎！ お前の脳みそは飾り物か！」

摩利が丸めたノートで姐さん呼ばわりした生徒の頭を叩く。

それほど痛がっている様子ではないが、鋼太郎と呼ばれた男子生徒が頭を押さえて縮こまっている。

「そんなにポンポン叩かないでくださいよ委員長。……ところで彼らは？ 新入りですかい？」

「こいつらはお前の言う通り新入りだ。生徒会枠でうちに来る一年E組の司波達也と風紀委員長選任枠で私が連れてきた一年E組の四々舞兼だ。」

男子生徒たちは二人とも驚きと疑問を持ったような表情をしている。

無理もない。生徒会の推薦と摩利の推薦が二人とも二科生なのだから当然だろう。

「へえ、二人とも二科生ですか……。」

「そんな了見だと足下をすくわれるぞ？　ここだけの話だが、さつき服部が足下をすくわれたばかりだ。」

「なんと！　あの入学以来負け知らずの服部が？」

こいつは逸材だ！と、歓迎される達也。

鋼太郎と呼ばれた男子生徒が兼に歩み寄ってくる。そして耳打ちをするように顔を近づけてくる。

「四々舞って言ったか？　姐さんが引っ張ってきたって段階で疑っちゃいけないが……その、頑張れよ。」

歓迎はされているものの、どういうわけか言葉の端々から同情の色が見え隠れしている。

「は、はあ……。それは一体どういう？」

疑問を解消しようとする質問を投げかけるが――

「ここらお前たち、入学したての一年坊たちを可愛がりたくなるのもわかるが時間が時間だ。親睦を深めるのはまた今度にしろ。」

「おっと、時間切れみたいだ。まあ、そのうち分かる。」

摩利が割って入った為、納得のいく答えを得られなかった。

そのあとお互いに改めて自己紹介をし、解散となった。



解散し、生徒会室の方に戻るときに兼は達也を呼び止める。

直ぐに行くかと伝えたので摩利は先に生徒会室に戻った。

「どうした、何か聞きたいことでもあるのか？」

「いや……聞きたいことというより、忠告？」

そう。本来なら真由美は兼と会話するのではなく達也と会話する。

その時に達也は真由美の本性、というか素の状態を知ることになつて彼女との接し方を確立するわけだが……。

(今回は俺が会話したことによつて達也は真由美のことを深く知らないままになつてしまっているからな。フオローしないと。)

勿論、それが原因でとんでもないことになるとは限らない。だが、知っておくことに越したことはない。

「忠告？ 一体何の？」

「七草先輩についてだ。」

達也の表情が心なしか険しくなつた気がした。互いに四葉の縁者だと知っているからこそその警戒か。

だが、兼が話そうとしていることはそんな面倒な話じゃない。そこまで真面目腐つた雰囲気を出されても困る。

「あー……忠告つつつても性格の話だぜ？ あの人は普段は猫を被つてるから互いに気を付けようぜつてことを言いたかつただけだよ。」

「……なんだ、そんなことか。人は常に本心でいるわけじゃないからそんなものは当たり前だ。ましてや彼女は十氏族だ。腹芸を身に着けていない方があり得ない話だろう？」

御尤もである。ただ、兼が言いたかつたのはそういうことじゃない。

「えーつと……そうじゃなくてだな。俺が言いたかつたのは、あの人が素顔を見せるときは相手を認めている時だけらしい。」

「今回はお前にその素顔を見せてきたから俺にも見せてくる可能性があるあるつて言いたいのか？」

「そう！ それを言いたかつたんだよ。それで、互いにおもちゃにされないように頑張ろうぜつてな。」

言いたいことは言い切つたとすつきりしたような表情で階段を上つていく兼。

達也は言葉を返さず一緒に階段を上る。

(兼はそんなことを言うためだけに俺を引き留めたのか？ 四葉の表舞台専門の実働部隊『四々舞』の子息が?)

あまりにも単純なことを忠告してきたから何か裏があるのではないかと勘繰ってしまふ達也。

しかし、わからないことを考えても仕方がない。達也は忠告のことを一旦頭の隅に置くことにした。

兼本人は、真由美のお茶目な性格に注意しとこうぜ。とお節介を焼いただけである。

互いの意識の差からこうもすれ違いが起きるとは兼も思いもしないだろう。

この一件で兼がちよつとした災難に遭うわけだが達也も、ましてや兼本人も知る由もなかった。

翌日の昼休み。

達也は深雪と一緒に生徒会室に向かった。

対する兼は、レオにエリカに美月の四人で食堂で駄弁りながら食事をしていた。

「まさか二科生から委員会入りする奴が出てくるとはなあ。」

「まあ、達也君ならある意味順当じゃない？ 魔法式を読み取れるのだから風紀委員会からしてみれば未遂犯に対する抑止力として喉から手が出る能力のはずよ。」

レオとエリカが達也の委員会入りの感想を述べている。

因みにエリカ達は兼も風紀委員会入りしたことも知っている。朝のうちに伝えたからだ。

「それにしても、風紀委員長選任枠ねえ……。」

「風紀委員長自らが後進を育てるための枠があること自体は知ってたけど、まさか兼君が選ばれたかあ……。」

「ええつと……きき、きつと名誉なことだと思いますよ、兼さん！」

目を付けられたなと悪い顔をしているレオ。

達也君とは違った方向で目立ってみたいだし、こつちもこつちで順当なんじゃない？と軽い同情の表情をするエリカ。

兼が気落ちしないように必死なフォローをする美月。

「ありがとう美月。励ましてくれるのは君だけだよ……。」

美月に感謝しつつ、レオとエリカをジト目で睨む兼。

二人は悪びれることもなくケラケラと笑っていた。

「でもまあ、それなりに実力を認められた上での抜擢なんですよ？

兼君は四々舞流剣術を使えるわけなんだし。」

『四々舞流剣術』

この流派は少し前までは有名でも目立つわけでもなく、ひっそりと存在する流派だった。

注目されるようになったのは間違いなく、父の武雄が第三次世界大

戦で活躍したからであろう。

詳細は省くが、基本的には四々舞流には魔法を前提とした技はない。

この剣術のメインはあくまで剣術であって魔法と剣術の融合ではない。そちらは千葉家の専売特許だ。

なので剣術の型に邪魔にならない術式を使うことがメインになる。単なる剣術を魔法と組み合わせることによって驚異の戦闘力を生み出したのが武雄なのだ。

言ってしまうえば純粹な剣術としては完成しているが、魔法剣術としてはまだまだ発展途上段階なのである。

「そうは言うがな……実戦経験があるのならまだしも、まったくの未経験だからな」

「でも、覚悟はあるのでしょっ…」

「そりゃあ、まあ……」

エリカに人の命を奪う覚悟はあるのかと問われ、戸惑いながらも答える兼。

「ならいいじゃない。まあ、取り締まるときはそんな覚悟必要ないだろうけどね」

「……うっせ」

突然の真面目な空気から一転、おちやらけた表情になるエリカ。

試されたのだと気づき、やや機嫌を悪くする兼。

どこにいても玩具にされる運命のかなと、早くも諦めの境地に到達しそうな兼だった。



放課後、達也と一緒に風紀委員会本部に向かう。

到着したときに森崎駿とばったり出くわすが、摩利が一喝すること
でいがみ合い——森崎のほうが一方向的に噛みついてきただけが――

―はすぐに終わり、摩利に促されるままに席に座る。

兼たちが据わったことで空席は無くなった。どうやら一番最後だったようだ。

「全員揃ったな？ そのままで聞いてくれ。今年もまた、あのバカ騒ぎの一週間がやってきた。風紀委員会にとつては新年度最初の山場になる。」

摩利が上座で話し始める。

内容的には、騒ぎを止めようとしてさらに騒ぎを拡大させないようにだとか……まあ、察するところである。

「いいか、くれぐれも風紀委員が率先して騒ぎを起こすようなことをするなよ？」

一瞬だが、摩利の視線がこちらに向いた。

無理もない。兼は紛れもない問題児筆頭なのだから。

「今年は幸い、卒業生分の補充に加えて見込みのあるやつを私が引って張ってきた。紹介しよう。立て」

摩利に促され、三人が立ち上がる。表情は三者三様だ。

緊張しているが、それ故にこの仕事に熱意を持って取り組むという姿勢を見せている森崎。

落ち着いた面持ちながら肩の力を抜き過ぎているような風情のある達也。

緊張もせず落ち着いてもおらず、これからのことが楽しみで待ち遠しいという雰囲気隠しきれていない兼。

森崎の態度にも達也の態度にも一定の好感や頼もしさを感じる者はいたが、委員長摩利と、前日に顔を合わせた辰巳と沢木以外は兼に対して前向きな感情を向ける者は一人もいなかった。

ふざけている様に見えるからか、はたまた舐めてかかっている様に見えるのか。人それぞれである。

「教職員選任枠からI―Aの森崎駿と生徒会選任枠からI―Eの司波達也。そして風紀委員長選任枠から同じくI―Eの四々舞兼だ。今日から早速、パトロールに加わってもらおう。」

一部の生徒を除きざわつきが生じる。おそらく達也と兼のクラス

名を聞いたからだろう。

「部員争奪週間は各自単独で巡回してもらおう。新入りであつても例外ではない」

「役に立つんですか？」

教職員選任枠の一人である岡田という二年生が摩利にそう質問を投げかける。

形式上一年生三人全員に対しての言葉なのだろうが、岡田の視線は主に達也と兼の二人を向いていることが彼の本音を語っていた。

「心配するな。三人とも使えるヤツだ。司波の腕前はこの目で見ているし、森崎のデバイス操作もなかなかのものだ。」

「最後の彼は？」

「お前は二年だから知らないだろうが、彼はこの学校のOBとOGで生徒会役員も務めた四々舞剣先輩と四々舞沙耶先輩の弟だ。」

摩利のこの一言で三年生たちがざわつく。

あの二人の？といった言葉が聞こえてくる。兄さんと姉さんは優秀だったからなあ……。

「私も彼の実力を確認したわけではないが、とある筋の情報からだの問題ないと太鼓判を貰っている。何より私がコイツを気に入った。」

実力があつて私が気に入ったんだ。文句はないだろう？という副音声がかえりこえるような発言に岡田は口を噤む。

元々、兼は風紀委員長枠で選ばれた人物だ。選んだ本人が実力ありと判断している以上、現段階では文句は言えない。

文句を言えるようになるのであれば、兼が職務を全うできなかった時だろう。

「他に言いたいことがあるヤツはいないな？」

これ以上、口を挿む人物はいなかった。

三年生はお手並み拝見と様子見に徹する者や、我関せずと己を貫くもの。

二年生には口を出したかった者もいたようだが、上が口出しをしなるところを見て、今はこれ以上何も言えないと判断したのか口を出さなかった。

「誰もいないということ、これより最終打ち合わせをする。」

摩利が会議の締めに入る。その上で新しく入ってきた一年生3人には自分が説明する旨を伝える。

「では早速行動に移ってくれ。出動！」

摩利と新参組三人を除く六人が、次々と本部室を出ていく。

沢木と鋼太郎は達也と兼に激励の声をかけながら本部を後にする。

森崎がこちらを睨んでいるが、達也も兼もどこ吹く風である。

「やれやれ……。三人にはまずこれを渡しておこう」

摩利が今の光景に頭を抱えつつもすぐに意識を切り替え、腕章と薄型のビデオレコーダーを手渡す。

「レコーダーは胸ポケットに入れて使え。あと——」

その後、レコーダーの使い方や風紀委員の権限、そしてCADについての説明が行われた。

その時に達也が備品のCADを二機借りていくということから一悶着あったが、それ以外は問題なく進んだ。



達也はエリカと回りながら巡回することなので教室に向かった。

兼の指示された巡回エリアは、熾烈を極める校庭エリアから外れた一年棟と第一、第二小体育館だ。

一年棟はあまり巡回する必要がない——直接教室に押し掛けることは禁止されているらしい——とはいえ、まったくしないのは問題なので場慣れしてもらうためにと配置された。

第一第二小体育館の方は、非魔法競技系の部活動の比率のほうが多いのと、狭い空間では魔法の打ち合いよりも取っ組み合いになりやすいことを考慮してのことだろう。

遠回しに実力を示して周りを認めさせる。と摩利に言われている

気がしてならないが、魔法の打ち合いよりも取っ組み合いのほうが対処は簡単だなど、兼は前向きに考え早速一年棟に向かった。

敷地が広いとはいえ、五分も十分もかかるほどの広さではない。すぐに一年棟に到着し、巡回を開始した。

最初に反感が少ないであろう二科生の教室が集中している階を巡回する。

巡回の途中、走ってどこかに向かう達也とすれ違ったが、向こうがこちらに話しかけてこなかったことから、兼の助力を必要としない程度の案件なのだろう。

実際はエリカを探しに奔走しているのだろうということは知っているから、こちらでも声をかけずに見送ったわけだが。

(傍から見たら青春してるようにしか見えないねえ……)

事情を知らない人から見ればただ達也が廊下を走っているだけだが、事情を知っている兼からすると、エリカとの約束を守れなかった達也が急いで彼女も場所に向かっているのだから、ニヤケずにはいられない。

ごちそうさまです。と手を合わせながら達也を見送る兼。合掌に満足した兼はさっさと巡回に戻る。

二科生たちは自分たちが引つ張りだこに会うことはないと思っっているようで、教室にいる生徒帯からはどのクラブを見学しに行くか等、のんびりした空気が流れている。

人によつては二科生だろうと関係なく、マスコットとして取り込もうとしてくるクラブも存在する——エリカはその被害者になったりするわけだが——から気を抜き過ぎるのは禁物だ。

兼は二科生の階の巡回を終え、一科生のクラスが集中する階に向かう。

到着し、巡回を開始するが一科生たちで教室に残っている生徒たちはごく少数だ。

密かに出回っている入試成績上位者リストのこともあるだろうし、今頃一科生の大半は引つ張りだこに会っているに違いない。

「そういえば、北山さんと光井さんはまだ教室にいるかな……」

二人とも成績上位者だからどこでも引つ張りだころう。まだ教室に残っているのであればそのことを伝えて人込みに埋もれてしまわないように伝えようかと思ひ、1—Aを目指し歩みを進める。

途中、二科生ということの一部生徒から睨まれたりしたが、風紀員の腕章をしているからか絡まれるようなことはなかった。権力つて頼もしいし怖い。

1—Aに到着し教室を覗くも、二人の姿は見当たらなかった。人足遅かったようである。

一通り一年棟の巡回を済ませたので、兼は小体育館に向かうことにした。

第一小体育館から向かうのが数字の順番的にしつくりくるが、兼は敢えて第二小体育館に向かった。

何故ならば、達也が面倒ごと巻き込まれるからだ。

ここ数日は自分の欲求を満たすためにハッスルしており、本来の目的である護衛の任務をすっぱかしていたのでその補填というわけではないが、達也一人が奇異の目に曝されるのではなく自分もその場で手伝うことで、意識の分散を凶ろうと考えたのである。

「余計なお世話にならなきやいいが……。」

達也一人であの場を捌けていたのだ。俺がその場に入ることです計な負担にならないかと一抹の不安を覚える。

がしかし、兼はその不安を振り払う。

そもそもここで尻込みしては達也たちの護衛なんて到底不可能だ。

兼は自分の両頬を叩き、気合を入れて第二小体育館に向かうのだった。